

国語科

高田 徹
山本 瑞穂
天野 雅美

1 国語科における知識創造とは

表現・理解をより良いものにしていく活動

適切に表現する力
正確に理解する力

伝え合う力

思考力・想像力

言語生活を豊かにしていく営み

人が言語を運用する場合は大きく二つに分けられる。すなわち、伝え手として言語で表現する場合と、受け手として言語から理解する場合の二つである。

伝え手である場合、人によって言語感覚が異なるために、同じ意味内容を表そうとしても伝え手が違えば表現は違ったものになる。一方、受け手の場合でも同様である。同じ表現に接しても、人によって言語感覚が異なるため、受け手が違えばその理解が違うものになるのである。

国語科では、このような人によって違う表現・理解を相互に交流することで「表現・理解をより良いものにしていく」活動を設定する。なぜなら、この活動で言語感覚を高めることができると考えたからである。

言語感覚の高まりを具体的に述べるならば、まずは伝え手としての「適切に表現する力」・受け手としての「正確に理解する力」が挙げられる。これらは、欠くことができない基礎的な力である。

次に、表現・理解をより良いものにしていく活動は、それぞれの表現・理解の長所を互いに交流するのであって、優劣をつけて取捨選択するのではない。ゆえに、表現・理解を相互に交流する活動では、人と人との関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら言語で伝え合うという「伝え合う力」が培われる。

さらに、表現・理解がより良いかどうかは、相手、目的や意図、場面や状況に応じて言語が使われているかを観点に、思考や想像をすることである。したがって、この活動で子どもの「思考力・想像力」は、より論理的でより豊かなものになる。この思考力・想像力は、認識力や判断力とかかわって新たな発想や思考を生み出す源となり、言語を通してものの見方や考え方を確立することで、自己形成や社会生活の向上をも望むことができる。

このような言語感覚の高まり、つまり「適切に表現し・正確に理解する力」を基盤として、「伝え合う力」を培い「思考力・想像力」を向上させることで、自己形成・社会生活の向上に寄与していく営みを「言語生活を豊かにしていく営み」ととらえ、国語科における知識創造を次のように定義する。

自分なりの表現・理解を相互に交流しより良いものにする活動を通して 言語生活を豊かにしていく営み

2 国語科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

(1) 国語科におけるよさ

表現・理解の変容

これまでに述べた国語科における知識創造のプロセスには、子どもにとって次のような三つのよさがあると捉えている。

一つ目は子どもの表現・理解それ自体が変容することである。知識創造のプロセスでは、子どもの表現がより適切なものに、理解がより正確

なものに変容していくのである。また、変容するよさには、変容をもたらした言語感覚の高まりも含むととらえている。

伝え合う体験

二つ目は言語で伝え合う体験ができることである。それは、互いの立場や考えを尊重したうえで、それぞれの表現・理解の長所を交流しあうという体験である。

思考・想像の観点を獲得

最後は、相手、目的や意図、場面や状況という、国語科で思考や想像をするうえでの観点が獲得できることである。この観点は、よりよいものにしていくために表現・理解を比較検討する場での思考の観点であり、国語科としての学習方法を獲得することでもある。

以上の三つのよさを子どもが共有できるように、国語科として以下の手立てを考えている。

(2) よさの共有の手立て

①可視化

知識創造のプロセスのよさを認知したならば、子どもの表現・理解はより適切・より正確なものへと変容し始める。そのような変容が始まるのは、相手、目的や意図、場所や状況に応じて、どういう表現がより適切か、どういう理解がより正確かという判断が子どもに起こるからである。だが、子ども自身は自己の表現・理解の変容やその変容の根拠となる判断への意識は薄い。

変容とその根拠の可視化

そこで、自己の変容やその根拠を子どもが意識できるよう、学習をふりかえる場をもたせたい。これは単元の終わりだけに限定されるものではなく、必要に応じて取り入れたいと考えている。

そのうえで、このような表現・理解の変容とその根拠を、板書や掲示などによって、視覚に訴えて明確にする手立てを講じたい。

これらの手立てによって、相手、目的や意図、場面や状況を観点として、表現・理解がより適切・より正確なものへと変容したという知識創造のプロセスのよさを子どものものでできると考えている。

②「かかわり」

自分の立場や考えが尊重される体験からそのよさが認知できる。このような体験を積み重ねることで、伝え合う活動での「かかわり」が活性化し、よさが子どものもものになっていく。

聴くことの重視

その手立てとして、国語科では聴くことを重視したい。

話し合いの論点に焦点があたるような問いかけや助言によって、自分の感じたことや考えたこととの差異に気付けば、話し手としての欲求が生まれる。つまり「かかわり」が活性化するととらえている。また、語彙の不足から、的確に表現できない・友達の言いたいことが汲み取れないなど、話し合いがかみ合わないことがある。このような場合には子どもと子どもの間に入り、表現の不足を補うことで双方の橋渡しをする手立てを講じたい。

③実践的自覚のデザイン

子どもの言語感覚に即した課題設定

子どもの表現・理解は直観的である場合が少なくない。だが、たとえ直観的であっても、その表現・理解には無意識にその子なりの言語感覚が実践的自覚として内包されている。そこで、子どもの言語感覚の実態を考慮し、その子なりの言語感覚に基づいた表現・理解が無理なく自然に引き出されるような、必然性のある学習課題を設定したい。また、学習課題を設定しても本時までにはその課題を子ども自身が忘れてしまうことがある。そのような場合は、本時は何について考えるのかが子ども一人一人に明確になるような手立てを講じたい。そのうえで、疑問や驚きなどの心情を子どもが課題に対して持つような手立てによって、課題を子どものものでできると考えている。